ザ・若者
夢を追う、夢を継ぐ

14

先人の暮らしを掘り起こす

取材・文　社納葉子
写真　後藤鐵郎

作業着に身を包んだ身長一四四センチの小柄な女性が、今日も現場を掘り起こしています。

櫻田小百合さん
（学芸員）

取材当日、大阪市内の工事現場で発掘が行なわれていた。

以前の建物は撤去され、焦げ茶色の地面がむき出しになっている。四角く切り取られたような一画が櫻田小百合さんの仕事現場だ。

持ち前の頑固さで、膨大な作業に立ち向かう

櫻田さんが所属する大阪文化財研究所は大阪市教育委員会の委託を受け、埋蔵文化財の調査を行なっている。

発掘されるものは土器や陶磁器以外にも石器や木器、ミニチュア土製品など多岐にわたる。

その一つひとつについて見つかった場所や材質、大きさ、厚みなどあらゆるデータがとられ、記録され、保管される。

欠片は拓本をとり、測って図面に起こし、もとの形を絵で再現させる。さらに地層を指先でなぞり、砂粒の大きさまで記録する。緻密かつ膨大な作業だ。

「歴史が変わるような発見はほとんどありません。同じようなお茶碗や瓦を何百個も測って描いてファイルして。

〝何が面白いの？〟と思いますよね（笑）。でも調査を積み重ねて、他の調査と比較しながら研究を進めると、小さな一点がどんどん広がって、その時代の光景が見えてくるんです」

子どもの頃、美術好きな母の影響もあり、家族で博物館に出かけることが多かった。

高校時代は部活の弓道に打ち込んだ。「弓道は精神性が反映するところが大きいので、自分のやり方にこだわり過ぎると的に当たらないんです」。

伸び悩んだ時、先生に「あなたの頑固さがいいほうに働くといいね」と言われた。

「我ながら少々頑固者だとは自覚していましたが（笑）、それを長所にもできるのかと心に残りました」

「歴史をもっと学びたい」と生まれ育った静岡から滋賀の大学に進学、学芸員の資格もとった。そして発掘調査のアルバイトで発掘の面白さを知ることになる。

歴史や考古学に興味をもつ人は多いが、仕事にしたいと思う人は少ない。大学のゼミは五人で、最終的に櫻田さん以外は一般企業に就職したが、櫻田さんの心はまっすぐ発掘調査に向いていた。

調査の結果を今の世に活かしたい

夏は容赦なく直射日光にさらされ、冬は凍える。中腰で掘るため、腰も痛める。

また、たとえば長い間土のなかで眠っていた木器は空気に触れたとたん風化が一気に進む。乾燥を防ぐため水に漬けながら記録をとるなど、作業の一つひとつに気が抜けない。

苦労は多いが、発掘調査について語る櫻田さんは生き生きとしている。「やっぱり面白いんです。でも最近、自分だけが面白くてはだめだと思うことが多くなりました」と話す。

1985年、静岡県生まれ。滋賀県立大学人間文化学部在学中に学芸員の資格を取得。同大学院修了後、和歌山市などで遺跡発掘に携わる。2012年4月より、公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所に勤務。専門は弥生時代。

発掘調査は、文化財保護法によって定められている。古墳や住居跡などの場所を示す遺跡地図の区域内で土木工事などを行なう際には、届け出なければならない。

しかし発掘調査を強制する力はなく、個人宅なら国から補助金が出るが、開発事業なら事業主負担となる。その費用、数百万～数千万円。当然、納得できない事業主も少なくない。そこをいかに協力してもらうかが最初の大きな関門だ。

「交渉は教育委員会の役目ですが、私も調査員として少しでも〝そんなことがわかったのか〟と発掘の意義をわかっていただけるようにしたい。

調査の意義や結果、今の生活にどんな形で生かせるかを伝える責任があると思うんです。

さらにいえば、土地の持ち主だけでなく、その地域に暮らす人たちにも還元していきたい。

たとえば、地層を分析していくことで、そこにいつ人が住み始めたのか、なぜ住めるようになったのかがわかるんです。

洪水の被害の状況などもわかります。その土地の弱点を防災やまちづくりに生かすこともできるんじゃないかなと。

考古学に何ができるかというより、発掘調査をしている私たちに何ができるか。今、その答えを探しているところです」

天職と思える仕事を得たが、その手応えを自分だけのものにしては意味がないと気付いた時、新たな視界が開けた。

もっと大阪を知りたい、大阪に暮らす方とも仲よくなりたいと大阪市内に転居もした。

三十代を迎えたばかりの櫻田さん、いよいよ持ち味の「頑固さ」がよりよく活かされる時を迎えようとしている。